蕾の悦虐（ロリマゾ）４

強制入院マゾ馴致（前編）

絶海の孤島で繰り広げられる集団調教劇

濠門長恭

目次

主な登場人物 ..... - 3 -
入院前の検査：性器測定 ..... - 5 -
入院　１日目：オリエンテーション .... - 37 -
入院　２日目：破瓜療法 ..... - 104 -
入院　３日目：新陳代謝 ..... - 196 -
入院　４日目：ミニ運動会 ..... - 246 -
後書き - 344 -

主な登場人物

柴田英章

１１年前に前妻と離婚。

銀行支店長。ＳＭクリニック運営会員。

柴田（旧姓：増宮）花穂

女子短大を卒業してすぐ結婚。ひとり娘が２歳のときに夫と死別。夫の会社の元上司に飼育され、ＳＭクリニックに入院させられる。飼い主に飽きられて柴田英章に譲渡された。昨年の秋に形式上の結婚をしたが、実質はマゾ牝奴隷。

増宮芽衣

年頃の女の子だからＳＥＸにも興味津々だが、引っ込み思案で告られても「ごめんなさい」が先に立ってしまう。実父の記憶はまったく無い。

ロングヘア。数年後には母親譲りのナイスバディに成長しそうなプロポーション。今のところはぎりぎりＣカップ。

マゾの素質に恵まれている。

大貫春香

５年前から、実父と日常的にＳＥＸをしている。他の男や女、被虐にも悦びを見い出したいと入院を志願。

院長

　　ＳＭ（Slave Making）クリニックのオーナー

常勤スタッフ

　　タナカ　ハヤシ　ナカノ　カンダ

ボランティア（３名～６名）

　　ＳＭクリニック正会員。数日単位で入れ替わりがある。

看護婦

　　カズコ　サヨコ　アイコ

　　元入院患者が多い。本物の看護師もいる。

入院患者（先輩）

幸恵

　　愛人契約に調教入院が含まれている。退院間近。

彩子

　　新婚旅行で連れて来られる。反抗的。

一樹

　　一家心中でひとり生き延びて、父親の取引先に引き取られる。ホモＳＥＸ拒絶で入院。退院間近。

里菜

　　名家の娘。不良。愛想尽かしをした親に送り込まれる。調教後はサディストに売られる予定。

他に、患者と接触しない一般人が若干名雇われている。

入院前の検査：性器測定

ザザザザザザッパーン、ザザザザ……

モーターボート（外洋クルーザー）は波の上を飛ぶように走っている。

見渡す限りの海、海、海。十五分も見ていたら飽きてしまう。けれど、わたしは断固として海とドピーカンの青空を眺め続ける。だって、振り返ったら。デッキチェアに寝そべってる春香ちゃんが目にはいってしまう。

ほとんど全裸。いちおう水着らしき物は身に着けている。薄くて小さな三角の布を双つならべて紐でつないだトップスと、同じくらいに小さな三角形のボトムス。マイクロ紐ビキニとでもいえばいいんだろうか。裏布もないから、ささやかな乳房の頂点の陥没気味の乳首も、無毛のぷっくりした縦筋も、形がわかるだけじゃなくて透けている。

「きゃは……くすぐったいよ」

そして、これ。お父さん（と、紹介された）がサンオイルを塗ってあげているんだけど、同じところを二度も三度も。お尻とか太腿はしつこく入念に。

視界の片隅で、春香ちゃんがあおむけになった。うわ……自分でほどいたのかお父さんの仕業か。ちっちゃな三角巾すら肌に貼りついていない。完全な全裸。

「あああんん……♡」

お父さんの手が双つの乳房にオイルを塗っているんだか愛撫しているんだか。

絶対に、この父娘は異常だ。

まあ。他人様の事情だし、実の父娘じゃないのかもしれないし（それでも大問題には違いない）、とにかく春香ちゃんは厭がってないみたいだから。

こんな人たちはうっちゃって、とっととキャビンに逃げ込みたいんだけど、それも非常に困難を伴う選択なのね。

キャビンの中には、ママと配偶者の柴田さ

ん。ママの配偶者であって、わたしの父じゃない。それから、中野さん夫婦――と紹介されたけど、事実ならすごい歳の差婚。二組とも新婚顔負けの熱々モード。というのは、婉曲表現。年頃の女の子（わたし）の目の前で、イチャイチャどころか、チュッチュッや揉み揉みまで！

だけど、どういう集まりなんだろうか。クルーザーの持ち主で、今はてっぺんで運転している神谷さんとは知り合いらしいけど、それ以外の人たちとは柴田さんも初対面みたい。

柴田さんは銀行の支店長。

大貫さんはあちこちのビルのオーナー。

中野さんは接客業の経営者。どんな接客業なのかは言わなかったから、つまり、そういう接客業だと思う。

お邪魔虫が消えて、キャビンの中はさらに温度が上がってるんだろうな――振り返って、あわてて目をそらした。ママも中野さんの奥さん（？）も、パートナーの前にひざまずい

て、頭が腰の高さにあった。
　まったくもう。海と空を眺め続けるしかないじゃない。
　なのに、背後の気配が気になって、ついつい盗み見してしまう。
　えええっ……！？
　今はお父さんがデッキチェアを起こして、そこに座っているのだけれど。春香ちゃん、お父さんに抱きついてる。ガン見する度胸はないから断言できないけど、対面座位の形だ。まさかね。
「どうした、春香？　動かないのか？」
「だあってえ……芽衣お姉さんが見てるよ」
「困ったやつだな。これくらいで恥ずかしがっていたら、毎日が懲罰だぞ」
　ペチンと、大貫さんが娘の裸の尻を平手で叩いた。
「ひゃうっ……ふうん」
　まさかじゃないみたいな雰囲気。にしても、懲罰とは物騒な単語。近親相姦なうえに近親

ＳＭ？　まさかとは、もういえなくなってきた。

やだ……熱い蜜がおりてくる。

わたしは奥手で引っ込み思案だけど。一学期だけで三人から告られて、即行「ごめんなさい」しちゃったけど。むっつりスケベな面もあるんだろうな。週末にオナニーは欠かさないし。

最近はオカズがヤバくなってきてる。柴田さんがお風呂にはいってきたときに、逃げ出さないで。一緒に浴槽に浸かっちゃうとか、背中（だけ？）を洗ってもらうとか。

ママは柴田さんにぞっこんというか、無条件の絶対服従。

「いきなり年頃の娘が出来て戸惑っているのよ。なんとか家族の絆を結ぼうと努力してるのだから」

テレビを観てるときに肩を抱かれたり太腿を撫でられたりするたびに過剰反応しちゃいけないなんて、言うんだものね。

あれって、夫婦の絆じゃなくて、御主人様とマゾ奴隷の関係だと思う。ママの手足に細長い赤紫色の痣ができていたり、背中やお尻にもっと太い痣が何本も走っていたり、三者面談で硬い木の椅子に座るときにコツンて小さな音が聞こえたり。そういうのに気づいたのは四年前くらいだった。それは、今も続いている。

ママが性的少数者のひとりだったとしても、それはかまわない。差別しちゃいけないって学校で習ったという以上に。柴田さんと（どこで）何をしているんだろうされているんだろうと、つい想像しちゃうときだってあって。そんなときも熱い蜜が湧いてしまう。

「ぼつぼつ見える頃じゃないか」

わ、びっくりした。いつの間にか、柴田さんとママと中野さんカップルの全員がデッキに出ていた。

ずっと海を凝視していたし、自動車二台分のエンジンが足元でぶん回ってるから、人の

動く気配に気がつかなかったんだけど。いったいどれだけ、わたしはボケーッとしてたんだろうな。
「あれかしら？」
　中野さんの奥さんカッコカリが正面ちょい左寄りの水平線を指さした。小さな三角形が見えた。
　わたしは、その三角形を凝視することに決めた。デッキの上は、これまでの三倍も凄まじいことになっている。
　ママは透け透け生地のワンピース水着。乳首とクリトリスとが勃起してるのも、永久脱毛した股間の具まで目に映ってしまう。熟年にもなってみっとも――なくないから、かえって困る。エクササイズとか熱心に続けてて、垂れないＤカップを維持してて、二十七歳以上には絶対に見えない。
　カッコカリさんの水着は透けていない。でも、リボンが二本だけ。十字架の横で乳首、縦で筋と具だけを隠してる。乳房本体と股間

の両側の膨らみは露出。この人もＶラインは無毛。わたしだけが仲間外れ。仲間になりたくもないけれど。
「懐かしくなってきたんじゃないか？」
　中野さんの声。カッコカリさんは、あの島にゆかりの人なんだろうか。

　十分もすると小さな三角形は大きな島影に成長して、じきに港と町並みも見えてきた。桟橋はきちんと整備されているみたいだけど、町並みはボロボロ。ガラスが割れてたり看板が外れかけてたりで、廃墟同然。でも、人は住んでいる。桟橋には二人の男性とひとりの女性が立っている。こちらへ手を振ったから、出迎えだろう。
　クルーザーが桟橋に横付けして、でもエンジンは止めない。
「芽衣と春香は、島の人たちに名所でも案内してもらいなさい」
「はーい♪」

とっくにマイクロ三角ビキニの紐を結び直していた春香ちゃんがサンダルをつっかけて、パレオも巻かずに桟橋へ降りた。
「用事が終わったら迎えに来るから。島で待っていてね」
ママに言われたら仕方がない。春香ちゃんを見習って、水着のままで（パーカーくらいは着てるわよ）渡り板を伝ってクルーザーから降りた。
これで、クルーザーには成人女性が二人と成人男性が四人。なんの用事だか、だいたいの想像はつく。
私たちを降ろすと、クルーザーはすぐに動きだした。
わたしと春香ちゃんとは、二人の男性に案内されて街へ向かう。男性はどっちも三十歳くらいで､柄は違うけどＴシャツとジーンズ。わたしたちの後を歩いてる女性は、暑苦しい長袖シャツにダボダボのジーンズ。わたしとしては、やっと同志を見つけたって気分。

町並みといっても、道路に沿って並んでいるのは十軒くらいで、その端に大きなＲＶ車が停めてあって､わたしたちはそれに乗った。というか、なんとなくの感じだけど、押し込まれた。助手席に女性で、二段目にわたしたち、リアシートがもう一人の男性。

「島の名所って、どんなのですか？」

「着いてからのお愉しみだよ」

わたしの質問、適当にはぐらかされて。車は島の中央に向かって、じきに細い山道を登りはじめた。

途中で他の車と行き会わないまま、開けた場所に到着。広場の奥にぽつんと五階建てのビルがあって、車はその玄関に横付けした。

ＳＭクリニック

精神科・内科・形成外科・リハビリ

こんな辺鄙な島にこれだけの病院なら、島の人たちにとっては自慢の種なんだろうけど、名所とはおおげさだと思う。

中にはいって。受付には誰もいないし、待合室も空っぽ。
「こっちよ」
今度は女の人が先に立って案内。『診察室』ってプレートの出てる部屋に通された。
ん……？
中には、かなり中年の医師（白衣を着てる）と、青色のツナギ服を着た男性が三人と、看護婦さんも二人。
男女差別かもしれないけれど、わたしは看護師って呼び方が好きじゃない。女性は看護婦、男性は看護士。病気や怪我で入院するときは、看護婦さんにお世話をしてもらいたい。
そんなことはともかく。目の前の六人は、全員が名前を胸に表示している。医師は「院長」とだけ書かれた小さな名札を白衣にピンで留めている。男性は半袖半ズボンのツナギ服の胸ポケットにカタカナで苗字がたぶんアイロンプリントされている。
看護婦さんは下の名前が右の乳房に、左に

は数字が、直接肌に書いてあった。つまり、それがはっきりと透けて見えるほどのシースルー！　しかも超ミニスカート。下着もまともじゃない。カップが乳首までもない黒のブラだけ――じゃなかった。黒い毛に見えたのは紐で結び留めたハート形の布。これ、Ｇストリングスっていうんだっけ。看護婦は看護婦でも、風俗のコスプレとしか思えない。

　わたしたちを案内して来た三人は姿を消して。男と女と四人ずつ。女性は全員がきわどい格好。わたしだって、パーカーの下はスクール水着だもの。

「ひとりずつカウンセリングをする。最初は春香ちゃんからだ。麻衣ちゃんは、そこのソファーで待っていなさい」

　いきなりなれなれしいチャン付け。は、ともかくとして。

「これ、どういうことなんですか？　島の名所を案内してもらうってお話だと思っていましたけど？」

「じきにわかる。おとなしく順番を待っていなさい」
　青色のツナギ服の男性がふたり、わたしの両側に立って。肩を押さえつけて無理矢理わたしをソファに座らせた。
　わけがわからないけれど、すごくきな臭い。なのに、わけがわからないから、当面は様子を見ているしかない。
　春香ちゃんが、院長の前の丸椅子にチョコンと腰掛けた。
「大貫春香ちゃんは、五月十日生まれの●三歳だね？」
　ということは、遅生まれの●学一年生。わたしは二月七日だから、二歳ちょっとしか違わない。そのわりには発育が遅いかな。なんて考えてるうちにも、問診が進んでいく。
「さて、春香ちゃん。きみは、どうしてここに連れて来られたかわかるね？」
「はい。あたし、パパ以外の男性に――女性もですけど、エッチなことをされるのが、と

ても厭なんです」
　春香ちゃん、さらっととんでもないことを言った。エッチなことをされるのが厭というのはあたりまえだけど、そこに『パパ以外』というフレーズが挿入されると、まるで意味が違ってくる。
「ふうむ。パパになら、エッチなことをされても厭じゃないんだね」
「すごく嬉しいです。気持ちいいし。お尻の穴は、まだちょっと痛いけど」
　近親相姦、しかも肛門性交……その告白を平然と聞いている院長。わたしは、頭がくらくらしてきた。
「いかんね。基本的に、女は男に奉仕する義務がある。しかも、他の人とエッチなことをするように命令したのは、きみのパパだろ？」
「それは、そうだけど……」
　人権無視、強制売春。とんでもないフレーズが、頭の中で駆けめぐった。
「もしかすると、身体に異常があるのかもし

れないね。水着を脱ぎなさい」
「はあい」
　春香ちゃんは立ち上がって。全身をくねらせながら紐ビキニを脱いで。子供体形から脱しきれていない華奢な裸身を平然と晒したばかりか、片手を腰に当てて上体をひねり、セクシーポーズの真似までしてみせた。
「こらこら、言われないことまでしなくてよろしい。手は腰の後ろで組んで、そこに描いてある足形に合わせて脚を開きなさい」
　院長が、立ち上がって春香ちゃんに近寄る。
　ぴくっと春香ちゃんの背中が震えた。
「いやあ……やめてください」
　腰をもじつかせながら、あんまり厭がってるふうには聞こえない。春香ちゃんの陰になってるのでよくはわからないけど、股間をさわられてるみたい。
「ふうむ。あまり濡れてこないね。乳首も陥没したままだ」
　院長は椅子に戻ると、右手の人差し指と中

指を舐めた。
「入院して治療を受ける必要がありそうだ。なに、十人くらいに抱かれれば、ファザコンも治るだろう」
「きゃあ、十人もですか♪」
　悦んでいるようにしか聞こえない。
「それじゃ、春香は別室で精密検査を受けなさい。さて……」
　カンダというネームプレートの若い男性に連れられて春香ちゃんが隣の部屋へ行くのを見送ってから、院長がわたしに目を向けた。
「ここに座りなさい」
「厭です！　いったい、ここはどういう所なんですか？　ファザコンを治すために、あんな小さな子に十人もＳＥＸをさせるとか……だいたい、ファザコンじゃなくて近親相姦じゃないですか！　きゃああっ……厭あ！」
　わたしの両側にいた男性が二の腕をつかんで、パーカーの中にもう一方の手を差し入れて乳房をつかんだ。

「痛い……やめてください！」
　乳房を引っ張られて立たされ、丸椅子まで引きずられた。
　抵抗しても無駄だ。オトナの男性が三人。看護婦も味方になってくれそうもない。できるだけおとなしくしておいて、クルーザーに戻ってから……迎えに来てくれるんだろうか。それが不安になった。
「他人のことよりも、自分のことを心配しなさい」
　白衣の男の声が、春香ちゃんのときより高圧的になった。
「きみは、お父さんとのスキンシップを頑なに拒んでいるそうだね」
「なぜ、そんなことを？　というより、あんなのセクハラです！」
　ママが柴田さんと再婚したのは、去年の十月。すぐに柴田さんの家に引っ越して。以来、わたしはセクハラの嵐に襲われている。
「娘が父親と風呂にはいる――それくらい当

然じゃないかな」
「冗談じゃないです。だいいち、あの人は父親じゃありません。養子縁組なんか結んでないんですから！」
　母親が再婚しても、戸籍上では男性配偶者が自動的に父親になりはしない。世間的には継父なんだろうけど、養子縁組しなければ法律上は赤の他人だ。
「やはり、きみも入院治療が必要らしい。もうすこし詳しく検査しよう」
「検査も入院も必要ないです。わたし、帰ります。春香ちゃんも一緒です」
　春香ちゃんを引きずり出そうとして隣の部屋のドアを開けて。わたしは目の前の光景が信じられなくて棒立ちになった。
　春香ちゃんは診察台の上であおむけになって脚を広げて、膝を手で抱えていた。その股間をコスプレ看護婦が覗き込んで、ノギスみたいな道具を当てている。
「クリトリスは仮性包茎。外側の直径は……」

女性の言葉をカンダがメモしている。なんてところを測ってるのよ！
「あら、まだ終わっていないのに。裸になって、隣の診察台で待っていてね」
わたしを追って、診察室の全員がドヤドヤ押し入ってきた。
「聞こえなかったのか。さっさと服を脱げ」
わたしを追ってきた男の一人が背中をこづいた。のは無視して。
「春香ちゃん、なんて格好を……そんなことより、帰るわよ。起きて服を着なさい」
春香ちゃん、膝を抱えて開脚したまま、きょとんとわたしを見上げた。
「ええー？　どうして、帰るの？　あたし、ちゃんと病気を治してほしいよ。それに……」
意地悪そうな笑顔。この子、ちゃんと現状を（わたし以上に）理解してるんだ。
「帰りたくても、帰してもらえないよ？」
「そういうことだ。さっさと脱げ。それとも、男に脱がされるのが趣味か？」

目の前の男を突き飛ばして、わたしは診察室へ駆け戻った。向きを変えてドアに突進。引き開けて廊下に飛び出――そうとして、立ちはだかっていたＴシャツにジーンズの男に押し戻された。

「困った娘だね。これは、あまり使いたくなかったのだが……」

院長――じゃあ、ない。白衣の中年男が両手に小さな金属板を握って、わたしに近づいた。金属板からはコードが伸びて、部屋の奥の箱につながっている。どれだけ危険かはわからないが、とにかく電気ショックの装置だと思う。

がしっと羽交い絞めにされた。金属板が顔に近づく。

「いやあっ！　やめて……！」

頭を振って金属板から逃れようとしたら、髪の毛を根元からつかまれて動けなくされた。

金属板が左右のこめかみに当てられて。

ドカン！

頭の中心で大爆発が起きた。目の前で火花が飛び交って、全身が痙攣している。息ができない。
わたしは床に倒れた。
「まったく世話を焼かせおって」
「それを調教するのが醍醐味じゃないですか」
わたしは誰かの足で蹴られて、あおむけにされた。顔にマスクが当てられた。
「深呼吸をしろ」
深呼吸をしたら、楽になった。
「芽衣、声は聞こえているな？」
わたしの名前が呼ばれたので返事をした。
「はい、聞こえています」
「立て」
わたしは立った。
「服を脱いで裸になれ」
わたしはパーカーを脱いだ。スクール水着も脱いだ。たたむようには言われなかったので、床に落ちたままにしておいた。
「そこの足形に合わせて脚を開け。手を腰の

後ろにまわせ」
　床の足形に合わせて脚を開いた。両手を腰の後ろで組んだ。
「こいつは、じゅうぶんに性熟しておるな。手加減せずに甚振れる」
「院長、お言葉に気をつけてください。甚振るのではなくて治療ですわ」
　胸にカズコ４３と書かれた看護婦が診察室へはいってきた。メジャーを取り出して、わたしのサイズを測っていく。
「身長１６１、バスト８６、アンダーは７１ですからぴったりＣカップですね。ウエストは５９、ヒップ８４」
　それから、膝の高さとか股間までの高さも測られて、手首や足首や腕や太腿の太さも測られた、検査室へ移動して体重も量られた。５１キログラム。
「診察台に寝て。さっきの春香と同じ姿勢をとりなさい」
　わたしは寝台にあおむけに寝た。春香ちゃ

んの姿勢を思い出せなかったので、じっとしていた。声に教えてもらって、わたしは脚を開いて、膝を手で抱え込んだ。
「淫毛は濃密ですね」
　ふだんから気にしていることを指摘された。事実だから気にならない。
「処女ですね。処女膜は輪状で薄いようですから、破瓜痛は軽いですね。院長にはお気の毒様……きゃあ！」
　カズコさんが、なにか謝っている。ひと呼吸おいて、股間に冷たい感触。
「淫裂の長さは六十八ミリ、大淫唇の厚みは左が九ミリ、右が八ミリ……」
　性器の細かなサイズをあれこれと測られた。それが終わると、立ち上がるように言われた。
「個室へ入れて、オリエンテーションビデオを見せておけ」
「電気ショックの効果が薄れたら暴れませんか？」
「そうだな。簡易拘束具を着せておけ」

わたしは、分厚い生地で作られた上衣を頭からかぶせられた。長袖は先端が袋になっていて、手を出せない。手を背中にねじ上げられて、袖の先から伸びている革のベルトで胸の上下を巻かれた。息が苦しい。上衣の裾は腰までしかない。その下には幅の広いベルトが垂れている。ベルトが股間をくぐって後ろへ引き上げられた。カズコ４３が、わたしの大淫唇を左右に開いて革ベルトを食い込ませた。股間を圧迫されて痛いし苦しい。胸の上下を巻いているベルトの間から乳房を引っ張り出すようにされると、息がすこし楽になった。でも、乳房が痛い。股間のベルトが、ほんのすこしだけ緩められて、痛みは少なくなった。

ナカノという三十歳くらいの男について行けと言われて、わたしは廊下に出た。階段を二つ上がって、奥へ進むと廊下が二本に分かれていた。その先の間仕切りは鉄格子になっている。

手前の部屋に、わたしより年上の若い女性が閉じ込められている。全裸でベッドに大の字に縛りつけられて、口はボールで塞がれている。床にミカン箱くらいの器械が置かれて、そこから突き出た棒が、ズッコズッコズッコズッコと、一定のリズムで女性の股間を突いている。

「んん、んん、んん、んん……」

苦しそうな呻き声。

「あぶうーっ！　んんんんんーっ！」

不意に女性の身体がのけぞった。全身が痙攣して、乳首を挟んでいるクリップが激しく揺れた。

斜め向かいの部屋には、わたしと同い年くらいの男の子が四つん這いの姿勢で床に拘束されている。女性と同じような機械で肛門を犯されながら、仁王立ちになった男性のペニスをしゃぶっている。男の子のペニスには表面がデコボコした筒がかぶせられていて、筒の先から伸びるゴムホースの先には太い試験

管が吊るされている。精液だろうか、試験管の三分の一くらいのところまで白濁した液体がはいっている。

わたしは、いちばん奥の部屋へ入れられた。部屋の中央に金属製のリクライニングシートみたいな椅子が置かれていて、そこに座らされた。椅子に取り付けられている革バンドで腹と腰を固定され、脚を開いた形で太腿と膝も拘束された。足首は椅子の脚に、腕は両側の肘掛に。正面の壁に大きなモニターがはめ込まれている。

「エンドレスで流すから、よく見て覚えろ」

画面が明るくなって、文字だけのタイトルが表示された。

『ＳＭクリニックへようこそ～嫌虐症の治療』

これまでに見聞きしてきたことが、ＳＭの文字とひとつになった。街でたまに見かけるサイトウ・マリコ・ビューティークリニックとか坂本木材とかじゃなくて、サドマゾのＳＭなんだ。通りがかりに見たさっきの二人は

調教されてたんだ。じきに、わたしもあんなふうに……

冗談じゃないわよ！

「これは、どういうことなんですか。すぐにほどいてください。なんで、わたしがこんな目にあわなきゃならないんですか！？」

わたしをここへ連れてきた男――ナカノが、薄嗤いを浮かべてわたしの顔を覗き込んだ。

「やっとお目覚めか。けっこう長く効いていたな」

一瞬も眠ってはいない。でも、彼の言う意味は察しがついた。あの電気ショックだ。あれが脳に作用して、判断力とか自由意志を奪われていたんだ。わたしは白衣の男に命令されるままに全裸になって、カズコ４３に恥ずかしい部分をあれこれと測られて……

「ひどい！　あんな恥ずかしいことをさせるなんて。これは犯罪です。訴えて……」

わたしの叫びは小さくなって、途中で立ち消えた。監禁されていたら、どこへも訴えら

えない。だけど、誰にも言わないから帰してくださいなんて――頼んでも無駄に決まってるし。
「警察にでもどこにでも、訴えたければどうぞ」
　わたしの考えを読んだみたいなことを言って――じわっと胸に手を伸ばしてくる。
「やだ！　やめて！」
　全身を拘束されているから、身をよじることもできない。
「お巡わりさあん痴漢ですよって、叫ばないのか？」
　服の上から乳房をわしづかみにされて、乱暴に揉みしだかれた。
「い、痛い……やめて。訴えたりしないから」
　いっそう強く握りつぶされた。
「口の利き方がなってない。ビデオで、そこらへんも習っておけ」
　ナカノは背後にまわって、抱きつく形で両方の乳房を揉み始めた。いや、揉むというよ

り拷問だ。乳房を毟り取られるんじゃないかと思うほど、分厚い生地を貫くくらいきつく指を食い込ませて引っ張ったり九十度もねじったり。
「やめて、お願いだからやめて。抵抗できない女の子を虐めて、あなたは愉しいの？」
　思いきり身をよじって振り返ったわたしと目が合うと、ナカノは唇をゆがめて嗤った。
「愉しいとも。しかし、おまえの認識は間違っているぞ。こういうのは、虐めるとは言わない」
　ナカノが、わたしの前に回り込んだ。
　バシン！
　いきなりビンタを張った。
「これも、せいぜい警告ってとこだな」
　今度は手を股間に伸ばしてきた。かろうじて性器を隠してくれているベルトをずらして、指を挿れてくる。
「く……」
　拘束に逆らって腰をよじったけど、革バン

ドが股間に食い込んで激痛が走ったので、すぐに動きを止めた。
　ナカノはやすやすと性器をまさぐり、入口を探り当てて、つぷっと侵入してきた。痛い……けれど、我慢できる。それに一本だけなら、処女膜を破られることもない。そんなことを考えている自分が馬鹿みたいに思えた。春香ちゃんでさえ、十人もの男に犯されるんだ。わたしは、もっと多くの男たちに輪姦されるんだろう。白衣の男も言っていた――手加減せずに甚振れるって。この瞬間に処女膜が無事でも、つぎの瞬間には破られるに決まっている。
「やめて！　まだ虐めるつもりなの？」
　ナカノは指を引き抜いて、白衣の男が春香ちゃんの性器を検査したときのように、ぺろりと指を舐めた。
「今のは、虐めたんじゃなくて可愛がってやったのさ」
「勝手なことを言わないで。虐められたくも

可愛がられたくもない」
　ナカノは、わざとらしく溜め息をついた。
「キャンキャンうるさいガキだな。吠えられないようにしてやる」
　ナカノは部屋の隅へ行って、サイドテーブルに置かれていた首輪を持ってきた。それをわたしの首に巻いて、息が苦しくなるくらい締めつけた。喉に当たる部分が膨らんでいて、そこから突き出ている金属の突起が痛い。
「似合ってるぜ。素っ裸にするときも首輪だけは残すよう、院長に提案するか」
　ナカノはわたしの斜め前に膝をついた。背もたれと腰のあいだに手を入れて、股間を隠しているベルトの金具を緩めた。
　下半身を剥き出しにして、もっとひどい悪戯をするつもりかと、身体を硬くしていると――ベルトの前をつかんでねじった。ねじりながら、金具を締めていく。ベルトの縁が、割れ目を切り裂くように食い込んでくる。
「痛い！……（くううううう）」

喉に鋭いショックが走って、声が出なくなった。ショックはすぐに消えたけれど、呼吸ができるようになるまで十秒以上かかった。
「こ、これ……」
わたしはささやき声で訊ねた。
「無駄吠え防止の電撃首輪――そうなんでしょ？」
「まさか。こんな強い電撃を与えたら動物虐待になる」
ナカノは人を馬鹿にした答えを返した。
「これはマゾの自覚が足りない牝に使う特性の首輪だ。おっと、牡ガキにも使ったな」
股間のベルトがいっそうきつく締めあげられた。ベルトの縁で粘膜をこすられる痛みと、性器を異物で蹂躙されるおぞましさと。でも、電撃が怖くて声を出せない。
「逆らえば逆らうほど、つらい目にあうんだ。いい加減で覚えろ」
そう言って、ナカノは部屋から出て行った。

入院　１日目：オリエンテーション

　いつのまにか消えていたモニターが再び明るくなって、タイトルを映し出した。
『ＳＭクリニックへようこそ～嫌虐症の治療』
　五秒から十秒くらいの映像がつぎつぎと表示される。
　男の足元にひざまずいてフェラチオをしている裸の女性。四人の男に上下前後から挟まれて(たぶん､すべての穴に挿入されている)悶えている裸の女性。素肌に革の装具をまとって二輪車を曳いている女性。全裸で逆さ吊りにされて股間を鞭打たれている女性。がちがちに緊縛されて雪の中に転がされている女性｡ふんどし姿で男と相撲をとっている女性。股下ゼロセンチの超ミニスカートとシースルーのブラウスで街中を平然と歩いている女性。成人女性だけでなく、春香ちゃんよりも幼い女の子まで写っていた。

「男を愉しませる穴を持つ実質的な牝は、このように被虐や露出に悦びを見い出すのが社会的に正しい行動様式である」
　とんでもないナレーションがかぶさる。
「被虐や、ときとしてはＳＥＸそのものを嫌悪する牝は、正常な行動ができるように治療を受ける必要がある」
　数秒の暗転で新しいタイトル。
『行動療法について』
「患者が入院にいたった経緯を、当病院は詮索しない」
　ナレーションと字幕が流れる。
「みずから進んで治療を望んだ患者もいれば、肉親や所有者から入院を強制された患者もいる。しかし、どのような事情であれ、患者は被虐に悦びを見い出せるようになるまで退院を許可されない」
　本気だろうか。ふつうのＳＭプレイで満足できなくなった（そして超お金持ちの）マニアが、わざわざ離れ小島にビルまで建てて凝

った遊びをしている。そう考えるほうが現実的なように思う。

わたしが毛嫌いするのに業を煮やした柴田さんが、たぶんママを強引に承諾させて、わたしにＳＭプレイを強制しようと目論んだんじゃないかな。

親子丼という単語が頭をよぎって、そわあっと背筋に鳥肌が立った。

「患者を洗脳したり、薬品で精神を鎮静化するような治療は、原則として行なわない。当病院ではもっぱら行動療法を実践している」

若い女性が画面に登場した。なんだか見覚えのある顔だけど、思い出せない。ピンクのノースリーブの、スモックだろうか。これもすごいミニ丈。突っ立っている女性のまわりを、カメラがゆっくりと一周する。スモックは背中が割れていて、首のところだけ紐で結んである。手術か何かのときに着せられる服じゃなかったかな。丈はもっと長かったと思うけど。

あ……ふっと思い出した。わたしが着せられている、この拘束ベルト付の上衣。拘束衣だ。昔の精神病院で使われてて、今ではＳＭ専用のアイテムになってるはず。

大画面の中では、一周し終えたカメラが正面からズームイン。

胸のところに布の名札が縫いつけてある。花穂……まさか。いや、間違いない。ママだ！名前の右に書いてある数字が年齢だとすると、十年前のママ。見た覚えがあるはずだ。

そういえば、小さな頃、三か月ほど知らない小母さんと暮らしていた記憶がある。あのとき、ママは――ここで調教されていたんだ。辻褄が合う。

服を脱げと命令されて、ママは拒んでいる。こっち（つまりカメラ）を指さして、なにか抗議している。ミュートになっていて、内容はわからない。

場面が変わって。裸の女性が屋外で樹の枝から吊るされている。うつむいているので断

言できないけれど、たぶん若いママだ。画面が引くと、鞭を握った男がママの前に立っている。

ぶうん、バチイン！

「ひいいっ……」

鞭打たれて、ママがのけぞる。

「間違った行為には、即座に罰が与えらる」

また画面が切り替わって。土下座しているママが、髪の毛をつかんで引き起こされた。目の前に勃起していないペニスが突きつけられると、ママはそれを口に含んだ。正座したまま、丹念にペニスを舐めまわし、玉袋を両手で揉む。ペニスが勃起してくると、音を立てながらすすったり横に咥えたりして――最後は、上半身全体を前後に揺すって射精に導いた。こくんと喉が動いて。ママは土下座して、セイなるお汁をちょうだいしてとかなんとかお礼を述べる。

また場面転換。地面に磔にされたママが数頭の大型犬に襲われて――じゃなくて、舐め

まわされてる。
「厭、厭です……ひゃああ、く、くすぐ……厭ああ！」
　悲鳴にしゃっくりみたいな喘ぎが重なって、だんだん嬌声に変わっていく。
「ひゃあっくうう……もう、やめ……ひいいい……きゃはああっ……あ、ひゃはあ……ひゃあん……あ、ああっ……はあああ……」
　ママの喘ぎがフェイドアウトして。
「正しい行為には褒美が与えられる。患者は常にこれを意識して行動するべきである」
　数秒の暗転と新しいタイトル。
『入院患者の一日』
　廊下に沿ってカメラが移動して、独房で眠っている裸の女性たちを見せる。
　ベルの音で起き出す女性たち。五人のうち三人は、背中の割れたスモックを着たが、一人は馴れた手つきでふんどしを締めた。別の一人は青色のツナギ服を着た看護士（調教師？）に縄で縛られた。ツナギ服は長袖で長

ズボンだった。

そういえば、ママがいなかったのは、春じゃなかったかな。

五人が広場に並んでラジオ体操。縛られている女性は、脚の屈伸と上体の折り曲げだけ。二人の看護士が見張っていて、動きの悪い女性を竹刀で叩いている。

ラジオ体操が終わると、広場の隅に掘られている溝をまたいで、いっせいに排泄。

「排泄は朝昼晩の三回に限られている。所定の時刻には、かならず排泄すること」

ホースからの放水で下半身を洗われ、排泄物もどこかへ流されていった。

それから、二階の食堂で朝食。縛られている女性は、ナースが（しつこいくらい咀嚼してから）口移しで食べさせている。

食器はセルフで洗って。それから使役労働。独房や廊下の掃除とか広場の隅の草むしりとか。調理のシーンはなかった。

それから、独房で個別学習。ＳＥＸテクニ

ックや（マゾヒストとしての）礼儀作法の動画を見るくらいで、実際には自由時間らしい。といっても、スマホなんか許可されるわけがないし、娯楽雑誌もない。前夜の責めで痛む身体を休めたり、カメラに向かってオナニーをするシーンもあった。その女性、ちゃんとアクメってた。きっと調教が進んでるんだろうな。

軽い昼食が終わってからが、いわゆる行動療法。ＳＥＸ奉仕とか羞恥系の責めとか。ここでは毎日数人のボランティアが治療を手伝う。つまり、患者をレイプする。

「ボランティアの皆さんは病院の支援者でもあり、社会的地位の高い人たちである。くれぐれも失礼のないように接すること。ボランティアに対する失礼な振る舞いは、極刑に値する」

ふつう、極刑とは死刑を意味するけど、ここではどうなんだろう。ボランティアというのは、つまり高い料金を払ってマゾ女（にな

りかけ）とプレイする客のことだろうし。

行動療法と称するＳＭプレイのいくつかが映されて。夕食のシーン。ぱぱぱぱっと画面が切り替わるので、細かなところは分からなかったけれど。いちおうは、患者（この単語を使うのは、すごく抵抗がある）もふつうに食べている。と思ったら。ボランティアが食べていて、患者は床に落とされた肉片とかを犬食いしているシーンが出てきた。うわ……ひどい。お尻に差し込まれたソーセージを、６９の形になって互いに食べてる。次のシーンでは、女体盛りをボランティアが食べていて、膣に突っ込んだお刺身をその女性に食べさせてる。

つまり、夕食までもＳＭプレイの一環なんだ。

そして夕食後は――ぷつんと暗転。

たっぷり三十秒は黒画面が続いてから。

『ＳＭクリニックへようこそ～嫌虐症の治療』

オープニングタイトル。あとは自分で体験

しろってことなんでしょうね！
　股間に食い込んだベルトの痛みがよみがえってきた。つまりは、それだけ熱心に動画を観てたってことを――認めないわけにはいかない。フィクションとして鑑賞するなら、まるきりリアリティのない状況設定で、ストーリイ性に欠けてて、とにかくわたしだったら絶対に買わない。でも。これが現実にわたしの身にこれから起きる事柄だと思うと――全身に鳥肌が立ってくる。

　動画が四回目を繰り返しているとき。
　それまで間断なく続いていた女性のくぐもった喘ぎ声が止まって。ガチャンと鉄格子の開閉する音が聞こえた。
「本物の牡棒だぞ。たっぷり味わえ――と言っても、六発は抜いたから、勃たせるのがひと苦労だな」
　数分の沈黙があって。
「夕食までに三発は出せ。できなければ二人

とも夕食抜きだ」

そして、ガチャンと鉄格子の締まる音。

男性は短時間に何回も射精できないはず。六連発（！）のあとの三発なんて、不可能だと思う。

足音がこちらへ近づいてきて。ナカノとカズコ、もうひとり別の中年男が独房へはいってきた。中年男はボランティアだから名前がわからない。

わたしは拘束をとかれて、独房の隅のベッドへ連れていかれた。拘束衣の股間ベルトだけをはずされて、マットもなにもないスノコが剥き出しのベッドに寝かされた。

抵抗するだけ無駄だから、わたしはされるがままになっている。手足を広げられてベッドの四隅に縛りつけられた。

カズコが押してきたワゴンから蒸しタオルを取り出して、わたしの股間に広げた。首をねじまげてワゴンを見ると、シェービングフォームや剃刀が乗っている。

アンダーヘアを剃られるんだろう。そういえば、動画に登場した女性は例外なく無毛だった。
「おとなしくなったな。首輪が効いたか」
「……なにを言っても無駄なんでしょ？」
ささやき声で言い返した――つもり。
「ここを剃られても文句は言わないのか？」
蒸しタオルの上から土手をなぞられた。
「言いません。好きなようにしてください」
諦めているんじゃない。深謀遠慮。従順なマゾ女に調教された振りをして、一日も早く退院してやる。そして……柴田は、どうせまたセクハラ（だけでは絶対に済まない）だろうから、拒絶したら再入院になりかねないから……家出するしかない。
「断わっておくが、俺たちは勝手気ままにおまえを虐めているんじゃないぞ」
「あなたの嫌虐症を治すために、綿密なカリキュラムが組まれているのよ」
蒸しタオルが取り除かれて、シェービング

フォームが恥丘一面に、会淫部まで吹き付けられた。
「ここをパイパンにするのも、ちゃんと意味があるの。おチ●ポ様を挿れていただくときに毛を巻き込んで粘膜を傷つける恐れがなくなるのね」
「クッションのないほうが、鞭も効果的だしな」
　ボランティアがククッと嗤った。
「動かないでね」
　カズコが大きな剃刀を下腹部に当てた。無駄毛処理用の安全カミソリじゃなく、小さな柳包丁みたいなやつ。
　ジョリ……肌の広い部分を一気に剃刀が滑るのが感じられた。恥丘を二度三度と逆剃りして、指で剃り跡を確認して。鼠蹊部や大淫唇にも刃が当てられた。
　それから足の縄をほどかれて身体を二つに折られると、いわゆるマングリ返しのポーズ。肛門のまわりまで剃られた。

「腋を処置する必要は無かったわね」

今日は水着だから、朝に手入れをしたばかり。

剃毛が終わると拘束をとかれて、拘束衣も脱がされた。かわりに与えられたのが、動画でさんざん見せられたピンクのスモック。『芽衣●５』の名札が縫いつけてある。問診とかは茶番劇をそれらしく見せかけるお芝居で、わたしが入院させられるのは既定の事実だったと、これで確信した。

裸でいるよりはましと思ったけれど。実際に着てみると、膝上三十何センチというより、股下五センチ未満。首のところにしか紐がないので、後ろは割れてお尻が丸出し。全裸より恥ずかしいくらい。

「おまえの治療は明日からだ。他のビデオを観るなり、カズキとアヤコの乳繰り合いを見物するなり、自由にしていていいぞ」

三人が出ていって、鉄格子がガチャンと閉ざされた。

今、何時なんだろう。独房にも通路にも時計がない。わざとかな。
「勃たないわね。もう、いいわ。一食抜くくらい平気よ」
「ぼくは平気じゃないよ。昼ご飯だって、あいつらの精液しか飲まされてないんだ。夕食まで抜かれたら倒れちゃうよ」
仕切り壁も鉄格子だから、隣の部屋は丸見え。二人とも後ろ手に縛られてる。女性はあまり協力的じゃないし、男の子も手が使えないから、強引にレイプすることもできない。それ以前に、勃起しないんじゃどうしようもない。
「もういいよ。うつ伏せで寝ててよ。自分でなんとかするから」
フェラを拒まれて、男の子――たしかカズキくんが、すねたような声をあげた。
ベッドに寝転がっているアヤコさんに馬乗りになって、半勃ちのペニスをお尻の谷間に押しつけて、腰を前後に揺すり始めた。

「夕食まで、あと三時間はあるわよ。ひと休みしてからでもよくない？」

アヤコさんの声、うんざりした響き。

二人の声だけ聞いてると、がっついてる童貞坊やを持て余してるお姉さんって感じだけど。二人ともさっきまで散々犯されてて、今は縛られてる。こんな状況で、あまりにふつうのＳＥＸの会話というのは、かえって非現実的に聞こえる。それとも、嫌虐症の治療というのが進むと、誰もがこうなるんだろうか。自分を二人に重ねて考えて――背中に戦慄が走った。

隣部屋の二人が休んでいるあいだに、わたしは早送りで何本かの動画を閲覧してみた。フェラチオのテクニックとかＳＥＸの体位とかレズの相互責めとか――この一年間でこっそり見たアダルトサイトの何倍もの分量があった。頭の中がエロ一色になっちゃう。

いちばん真剣に観たのは『マゾ牝の作法』というタイトル。

敬語を使え。けっして御主人様の目を見るな。『いや』とか『無理』とかは禁句。命令には即座に無条件に服従。質問も不可。質問は、答えに納得できなければ従わないという不服従を意味する。『ノー』を言える例外は、自分の感覚や感情の表現だけ。『気持ちいいか』と訊ねられたときは『よくない』と答えてもかまわない。ただし嘘と判断されたら厳罰が待っている。表現にも気をつけること。『やめてください』とへりくだってさえ命令のニュアンスを含んでいるので、最低でも『お赦しください』。できれば『お慈悲を掛けていただきたく思います』というふうに、自分の気持ちで表現するのが望ましい。

立ち居振る舞いも細かく決められている。立っているときはとくに命令がなければ、両足を三十センチ以上開いて、両手を頭の後ろで組む。いっさいを無防備にさらけ出す姿勢だそうだ。座るときも、つねに足は開いておく。椅子じゃなくて正座するときは、性器を

さわってもらいやすくするために、踵を立てた上に尻を乗せる。土下座をしたときは、赦しを得るまでその姿勢を保つ。ビンタでも鞭でも、叩かれたときにその部位をかばってはならない。

などなどなど！

本物の奴隷だって、こんな馬鹿らしい作法を強制されないでしょうよ！

動画を観ているうちに、二人の女性がそれぞれ男に連れられて独房に戻ってきた。

ひとりは『幸恵２７』。拘束されていないけど、タナカという中年男（たしか、桟橋まで迎えに来ていた男のひとりだ）に背中のスモックの割れ目から垂れた縄を握られている。

もうひとりの女性は、ナカノがリナと呼んでいただけで年齢はわからない。というのも、細い革のベルトを組み合わせた拘束具しか身に着けていなかったから。拘束具の腰から細い鎖が伸びていて、幸恵さんの縄とまとめて

タナカに握られている。
「引っ張るなよ。ちゃんと歩いてるじゃないか」
　マゾ牝のお作法をまったく無視した反抗的な態度。
「言葉づかいが悪い」
　ナカノが足を止めて振り返った。リナさんを引き寄せて――腹パンチ。
「うぐ……」
　リナさんは腹筋を固めていたみたいだし、ナカノが手加減しているのは見ていてもわかった。リナさんは苦しそうに顔をゆがめたが、倒れたりはしなかった。
「もう二か月にもなるというのに、ちっとも進歩がねえな」
「……申しわけありません。さっきの失敗のことを考えていて、つい……」
「つまり、骨身に沁みとおってないということだ」
　ナカノはリナさんを、独房の中に突き飛ば

した。腕を拘束されていてバランスがとれずに、リナさんは床に倒れた。そうか。こういうことがあるから、床に軟らかめのゴムが貼ってあるんだ。
「おや、新入りだね。ふうん……芽衣ちゃんか。あたいは里芋に菜っ葉で里菜」
　里菜さんは、わたしの斜め向かい側の独房。拘束具で乳房をくびり出されているせいもあるだろうけど、ゆうにＥカップはありそう。そして、これも拘束具で締めつけられているからか、ウエストはわたしより細いくらい。そして、やっぱりアンダーヘアが無い。
「あんたは、なんでここへ来たのさ？　幸恵みたいに、自発的に――にしては、ガキだよな」
　わたしは黙って首輪を指さした。
「電撃首輪か。ふつうに話すくらいじゃ作動しないはずだけど、まあいいや。そんなの着けられてるとこみると、騙されてか拉致られて――だね」

わたしはうなずいて。それから小声で。
「母の再婚相手に騙されて連れてこられたんです」
「実の親じゃないだけ、ましさ。あたいなんか――家の恥だとか言われて、売り飛ばされるんだからね。ここに売られてきたって意味じゃなくて……」
里菜さんの身の上話は、半日前のわたしだったら、本人から聞かされても絶対に信じなかったくらいに現実離れしたものだった。
里菜さんは不良チームのサブリーダーだった。と自己紹介されても、そんなふうには見えない。整った顔立ちにセミロングの、お嬢様タイプ。
ハイソサエティ（あ、やっぱり）に属する彼女の家はスキャンダルを恐れて、里菜さんを社会的に抹消することに決めた。それも、本人の同意を得たうえで。つまり、この施設でマゾ娘に調教してもらって、サディストに売り渡そうというのだ。そのサディストは、

里菜さんの家にとって主筋にあたるとかなんとか。明治時代の華族の淫欲絵巻みたいなストーリイだ。

里菜さんは、他の人たちの事情も教えてくれた。

サイコ（漢字は彩子）さんは、相手がサディストと知らずに結婚して、新婚旅行と称してここへ拉致られた。入院して五日目。とても反抗的だけど、もともとマゾの素質があったらしくて、鞭を快感と感じ始めているそうだ。

幸恵さんは自発的というか、愛人契約を結んだときに、入院が条件に含まれていた。

唯一の男性患者である一樹クンはわたしより一コ上の●六歳。両親が工場経営に失敗して無理心中に巻き込まれたが生き残って。工場の取引先のオーナーに引き取られて。この男がホモでサディスト。言い寄られて拒絶して、暴力でアナルバージンを奪われても屈しなかった。ので、ここへ放り込まれた。三か

月の治療で嫌虐症も男性恐怖症も治って、もうすぐ退院の予定。

お返しというつもりでもないけど、わたしは春香ちゃんが一緒に入院したことを教えてあげた。

「●三歳ってのは、そんなに珍しくないな」

驚いたふうもなく、里菜さんはそんなことを言った。

この病院というかマゾ牝養成所は、もう十五年くらい続いているそうだ。これまでに百人以上が調教されている。いちばん若い子は●歳だったそうだ。たぶん動画に出てた子だ。●二歳なら昨年も一人いたとか。こういうのは先輩患者からの伝承だけど、その子が入院させられた経緯までは里菜さんも知らないみたい。知っていたとしても、わたしが聞きたくない。

ふと、疑問が湧いた。里菜さんは二か月ものあいだ突っ張ってきたみたいだけど、マゾに調教されたふりをして退院させてもらおう

とは考えなかったんだろうか。
「試したさ。喜んでおチ●ポ様を舐めて、おいしそうに聖なるお汁とやらも飲んだよ。クリトリスに針を刺されながら、必死に彼氏とのエッチを思い出して濡らしてもみせたよ」
　でも、脳波測定とか催眠尋問とかで演技を見破られて、間違った行動に対する厳しい罰を与えられた。クリトリスに針って聞いただけで吐き気が込み上げてくるのに。それよりも厳しい罰なんて、想像もできない。率直にそう言うと、里菜さんは鼻先で嗤った。
「いずれ、あんたも経験するかもね。だけど、ひとつだけ安心させといてあげる」
　性的虐待ではなく、単純に苦痛しか与えず肉体を破壊しかねない拷問は、滅多にないそうだ。たまには、あるってことじゃない！
　爪の間に針を刺したりとか、光と大音量で何日も眠らせないとか、糞便を食べさせたりとか、毒虫を肌に這わせたりとか……
「もう、やめ……（痛い！　息が詰まる）」

首輪を忘れて叫んで、また電撃を食らった。「基本的には、苦痛を与えながら性的快感も与えるのね。そのうち、鞭で性器を叩かれてオルガスムスに達するようになるわ」

あたいのようにね――と、里菜さんがつぶやいたのは空耳だったかもしれない。

長い長い長い沈黙。

なんとか勃起させた一樹クンが、ベッドに上体を倒した彩子さんに立ちバックていう体位かな。腰を振っている。生々しい光景。きゃあとか言って目をそむけるべきなんだろうなと、ぼんやり考えながら、エッチな気分にもなれず、わたしはぼんやり眺めている。

そして……今夜にでも、わたしも同じことをされるんだと思うと。叫びだしたくなる。厭だ厭だ厭だ厭だ厭だあああああーっ！

でも、電撃は二度とごめんなので、もう動画にもうんざりしたので、硬いベッドに寝転がって、一分間に六十秒ずつ時をすごしている。

やがて、春香ちゃんも戻ってきた。ぐったりとカンダに寄りかかって、足取りもおぼつかない。わたしの向かい側の独房へ入れられると、すぐにベッドに身を投げた。
「いきなり三人に抱かれちゃった。何回も。しかも、ひとりはお尻だったの」
自慢げな口ぶり。父親以外の男性に嫌悪を感じてるようには、とても見えない。わたしが黙っていると、春香ちゃんはすぐに根息を立て始めた。

日が傾いて、たぶん午後六時くらい。ベルが短く鳴ってすぐに、男性が三人とカズコが、廊下の端のドアを開けて姿を現わした。独房の鉄格子を開けると、患者が廊下に出て整列した。
「なんとか二発、出せたな」
彩子さんと一樹クンも縄をとかれて、ピンクの後ろ開きスモックを着て列にならんだ。病院側がＳＥＸの回数を把握してるってこと

は、どこかに監視カメラがある。
　わたしも列の後ろについた。
「おまえは抑制具を着用だ」
　手を背後に高くねじ上げられて、手錠を掛けられた。カチッと音がして、首輪が下に引っ張られる。手錠の鎖が首輪につながれたらしく、手首を肩甲骨の高さに吊られたまま下ろせない。金属の突起が、ますます強く喉に食い込んでくる。
　里菜さんも革ベルトの拘束具を着けられたまま。
　一列に並んで階段を下りて、二階にＬＤＫよりもふたまわりくらいも広い部屋があって、そこが食堂。部屋の奥と出入口近くにテーブルがひとつずつ置いてある。手前のテーブルには、フルーツの大皿と八宝菜と素麺（悪趣味なメニュー）。アルコールは置いてない。
　それを横目に見ながら奥のテーブルに座る。紙の皿に細長い小豆のような――これって、ドッグフード？　別の紙皿に生のキャベツ。

箸もスプーンもない。
「里菜はボランティアに怪我をさせた罰、芽衣は治療を始めていないので、二人は夕食抜きだ」
　それでもテーブルにつかせるのは、他の患者が食べている光景を見せつけるためかな。でも、こんな餌、ちっとも食べたくない。
　しつこく白衣を着ている院長を含めて八人の男性が、まともな食事が乗っているほうのテーブルについた。
　四人は青のツナギ服。こいつらは院長の手下。看護士か助手か調教師か知らないけれど、わたしはこいつらをスタッフと呼ぶことに決めた。スタッフ四人のうち初めて見る顔は、ハヤシという名前だ。看護婦と違って年齢は書いてないけど、四十歳くらいかな。
　あとの三人は名札を着けていない。まちまちのラフな服装で、じゃらついた金の鎖を垂らしてたり腕時計を着けてたり、お金持ちっぽい雰囲気。この人たちがボランティア――

マゾ女を買いに来たお客なんだろう。
　コスプレナースはカズコ４３とアイコ２８の他に、あとひとり。サヨコ３２は、桟橋にわたしたちを出迎えた女性だった。彼女たちはテーブルの下に潜り込んで、立てた踵にお尻を乗せて膝を開くマゾ牝の正座。
　食餌（ショクジはこの字に脳内変換されちゃう）始めの合図で、春香ちゃん以外の三人が紙皿にかぶりついた。マゾ牝の作法どおりに開いた膝に手を置いて上体を傾けて、犬食い。春香ちゃんは左右を見てから、おずおずと紙皿に手を伸ばした。
「手を使うな！」
　ハヤシという中年と青年のあいだくらいの男が、春香ちゃんを叱った。
　春香ちゃんはあわてて手を引っ込めて。
「はあい、ごめんなさーい」
　なんか、この子。楽しい合宿にでも来てるみたいなノリだ。
　こっちのテーブルは無言の行みたいに静か。

あっちのテーブルは。
「春香の具合は如何でしたか？」
「処女のようにきつかったな。●歳のときから父親とやりまくっていたとは、とても思えない」
「身体が小さいせいもあると思いますよ」
「ケツ穴はスムーズだったぜ。あれなら、百人挿れても壊れない」
「なんといっても、フェラテクが絶品だったな。父親の教え方がよかったんだろう」
　耳をふさぎたくなるような卑猥な、そして痛ましい品評会。
「ところで、もうひとりのほうは？」
　ぎくっと、さらに聞き耳を立てた。
「あれは処女ですので。ＶＩＰ会員様からの予約がはいっております」
「それは明日の話だろう。ケツ穴に処女膜はないぜ？」
「羊頭狗肉は当院のポリシーに反します」
「いや、今のは冗談だ。忘れてくれ」

カチカチカチ……耳障りな音は、わたしの歯が鳴っている。処女を奪われるだけじゃなく、肛門も犯されるんだ。

それにしても……あいつ、わたしの『初めて』を他人に与えて平気なんだろうか。あいつってのは柴田のこと。バージンは面倒って男の子が言ってたのを耳にしたことはあるけれど、ヒヒ親父は処女に何十万円も払うって聞いたこともある。あいつは、ヒヒ親父派だと思うのに。

わたしたちのテーブルは長手方向が出入口に向いている。つまり、ちょっと横に視線を向ければ、男たちの食事風景が目にはいる。コスプレナースたちも。

彼女たち三人は四つん這いになって、男が床に落とした残飯を犬食いしている。あの三人は男たちの手助けをしているけれど、根本的にはわたしたちと同じ扱いを受けているんだろう。

――食餌の後は、一日三回だけの排泄。夕

暮れの広場へ連れ出されて裸にされて、溝をまたいでしゃがんだ（一樹クンも）。動画で観たとおりなんだけど、広場がずっと広くなってる気がする。駐車場というか公園みたいな印象。画像と現物の違いもあるけど。たしか動画では地面に掘った溝だったのに、現物は広場の端まで五メートル幅くらいで伸びているコンクリートのまん中に掘られている。

わたしも手錠を片手ずつはずされてスモックを脱がされた。

シャアアアア……

プシャアアア……

ぶりぶりっと大きいほうを出した人もいた。

わたしは――モーターボートに乗る前だから午前十時半頃にトイレに行ったきりだけど、飲み物はあまり摂っていないし汗もたくさん掻いているから、尿意はほとんどない。

「出ないの？」

乳房にアイコ２８と書かれているコスプレナースが、わたしの顔を覗き込んだ。

「明日の朝までトイレには行けないのよ。おねしょしたら厳しいお仕置きが待ってるわよ？」
　と言われても、出ないものは出ない。
「おねしょの罰はお灸よ。ちょっぴりだけなら小淫唇、床に水溜りを作ったりしたらクリトリスにお灸。熱くて気持ちいいわよ」
　アイコはナース服の裾をめくってGストリングスもずらして、性器をわたしに見せた。無毛の淫裂の頂点でぷくっと膨らんでいる蕾。そこに黒い斑点が三つもあった。中心がくぼんで、まわりの皮がすこし盛り上がっている。
「十年経っても消えないのよ」
　目をそらせて、わたしは下腹部に力をいれた。尿意が高まってきたけど、出る気配はない。羞恥心が膀胱筋を閉ざしている。
「困ったわね。処置してあげる」
　アイコがわたしの後ろから覆いかぶさるようにしゃがんだ。
「あっ……」

叫びかけて、声を呑み込む。おしっこの出るあたりに何かが触れたと思ったら、痛みを伴って灼熱感が襲ってきた。
「ほうら。シートトト」
灼熱感が奥へ移動して。急に薄れたと同時に。
ぶしゃあああ……おしっこがいつもより派手に飛び散った。太腿にもかかる。
「すごい勢い。綿棒まで押し出したわ」
アイコは、おしっこのかかった手をわたしの乳房で拭った。逃げようとすると、まだ濡れている手で髪の毛をつかまれた。
「首輪のそばで大声を出してあげようか？」
無駄吠え抑制首輪は、その犬の吠え声以外は拾わないはずだけど、誤作動しないとは断言できない。わたしは腰を落とした。
「そうそ。素直が一番よ。わたしらは直接手を上げたりはしないけど、男性に逆らったら……ふふふ」
アイコはまだ濡れている手でわたしの頬を

撫でてから、監視の位置へ戻った。

全員が排泄を終えると溝をまたいだまま立って、下半身にホースで水を掛けられる。わたしは乳房も洗われたけど、顔はそのままにされた。水を掛けると首輪の電気回路が故障するのかもしれない。

わたしはスモックを着せてもらえず、裸のまま建物へ戻された。これからなにをされるのかという不安で頭がいっぱい。無防備でいる心細さは感じても、羞ずかしがる心の余裕はない。

三階へ上がって、牢屋へ戻されたのは一樹クンと幸恵さんだけだった。わたしと春香ちゃん、里菜さん、彩子さんはさらに階段を上がらされた。そこは、ワンフロアぶち抜きの拷問場になっていた。

天井から鎖が垂れ下がり、磔のための十字架や金属パイプとスノコを組み合わせた拷問台、先端が鋭角に尖った三角木馬――わたしに見分けがついたのは、それくらいだった。

ほかにも、段違い平行棒みたいな仕掛けや大きな木の車輪があるけど、調教する女性を虐める道具だという以外には、使い道の見当もつかない。それから、家庭の浴槽より大きく深いガラスの水槽。里菜さんは水責めは滅多にないと言ってたけど、ほかに目的は考えらえない。

フロアの一画にはフィットネスのマシンが並んでいる。エアロバイク、手漕ぎマシン、ルームランナー。すごく健康的で場違い。まあ、裸の女性がフィットネスというのは、エロチックではあるんだろうけど。ＳＭとは違うと思う。

場違いなのが、もうひとつ。ダブルベッドよりも大きなベッド。四隅に柱が立っていて布製の屋根を支えている――と思ったら、屋根の裏側は大きな鏡。どういう目的に使われるかは明白。

わたしたちは六人の男性に取り囲まれた。ボランティアが三人と看護士が三人と。

「里菜、言うことがあるだろう？」
　囲みからはなれて立っている院長が、里菜さんを名指しした。
　里菜さんはひとりのボランティアの前にひざまずいて頭を垂れた。
「おチ●ポ様に噛みついてしまいまして、まことに申し訳ありません。お気の済むまで、里菜を罰してください」
　ほとんど棒読み。どうせ、こういうのは雰囲気を出すための演技に決まっているけれど、マゾだったら、もうちょっと情感がこもっているんじゃないかな。
「俺のおチ●ポ様には、まだおまえの歯形が残っている。消えるまで、ずっとクリ電撃の刑を続けてやる」
「……あ、ありがとうございます」
　与えられる罰への恐怖で、声が震えている。クリ電撃って名前から、その残酷さがわたしにも想像できた。
「つぎに、彩子。おまえは、まだ鞭を恐れて

いる。こちらの方に特訓をお願いしろ」
　彩子さんが、いちばん若いボランティアの前に平伏した。スモックが割れて、背中からお尻まで剥き出し。彩子さんは、ずいぶんとためらってから。
「彩子に鞭の味を教えてください。うんと厳しい百発をお願いします」
　鞭の痛さをわたしはまだ知らないけれど、ビンタ百発よりは厳しいだろう。わたしには、とても耐えられない。彩子さんはそれだけマゾに調教されているんだと、そのときは呆れたけど、そうじゃないと、あとで本人から教えられた。
　たとえば十発なんてお願いすると、不真面目だと叱られて、最低でも五十発の数え打ちを課される。数え打ちというのは、叩かれた回数を自分で声に出して数えなければならない。数え間違えたら最初からやり直し。そして――途中で性器を愛撫されたり、数えられないくらい早く連続で叩かれたりして。それ

でもきちんと数え続けたら、軽く叩いて数えさせておいて、いまのは数のうちにはいらないのにカウントしたとか難癖をつけられて。二百発以上叩かれることもあるとか。
　彩子さんが「うんと厳しい」と形容詞を付けたのは、一発ずつ数える余裕がないほど厳しく――そのかわり数え打ちを免除してくださいって意味なんだそうだ。
「百発も叩けば、こっちの腕が疲れちまうぜ。まあ、ボランティアだから仕方ないか」
　ずいぶんな言い草。
「春香は全員で治療してやる。初日から八人だ。嬉しいか？」
「あのう……まだ痛いし、すこし血も出てるんですけど？」
「甘ったれるな。傷が治りきらんうちに刺激を重ねれば、そこにマメやタコができて、名器になる」
「……はあい」
　能天気な淫乱娘も、さすがにしょげている。

春香ちゃんは何年も前から父親と性交渉を続けてきたらしい。それでも出血ってことは、粘膜が傷つくくらい激しいＳＥＸだったんだろうな。
「最後に、芽衣」
名前を呼ばれて、ぎくっと凍りつく。
「おまえは見学だ。彩子と春香への治療は、明日からおまえにも施す。そして、不適切な行動がどのように処罰されるか、里菜を他山の石にしろ」
「……はい」
返事をするのが正しい行動だろうと思って、首輪を刺激しないように小さな声で答えた。
「ハヤシくん、サヨコ。芽衣を座位で厳重拘束しろ。首輪は、はずせ」
二人がわたしを前後から挟んで――手錠と首輪をはずした。痛む手首を揉むひまもなく、再び背後にねじ上げられて縄で縛られた。胸にも縄を巻かれて、乳房を上下から圧迫される。

「あう……くううう」
　乳房に食い込む縄に、わたしの今の惨めな状況を思い知らされる。もう声は出せる。電撃を食らうこともない。でも、わたしは抗議もせず黙って縛られている。抗議は無意味だと、もうじゅうぶんに悟っているから。
　腋の下にも縄がとおされて、二の腕に掛かった縄を絞られる。乳房がますます圧迫されて……膝から力が抜けていく。
「おっと……なにをふらついてやがる」
　サヨコが腋の下に手を差し入れて支えてくれた。
「あ……いや」
　股間を指で穿たれて、おぞましさに腰が砕けた。
「驚いた。この子ったら濡らしています。初めての縛りで縄酔いなんて――マゾの素質じゅうぶんですわ」
「ナワヨイ……？」
　ちょこっとくらいなら、お酒を飲んだこと

もある。言われてみると、頭がぼうっとしてきたところなんか、酔ったときと感じが似ていなくもない。
「縛られて恍惚となることを、縄に酔ったというのよ」
「そんな……縛られて気持ち良くなんかない。ただ……無力な自分が悲しい」
「ふふん……そうね。おまえは無力。サディストに嬲られるマゾ人形よ」
　膣口にあてがわれている指が、ぐりっと侵入してきた。
「つう……やめて。抜いてください」
「あらあら、ますます濡れてきたわよ」
　物理的な刺激を受けたら、粘膜を保護しようとして身体が勝手に愛液を分泌する――ただ、それだけなのに。
「そうか。それじゃ気合を入れて縛るとしよう」
　首にも縄を掛けられて、その長い縄尻で胸の縄の上下を絞られた。乳房が上下左右から

圧迫されて縊り出された。
「すごいグラマーになったわよ。Ｆカップはあるかもね」
　サヨコがからかってるうちにも、乳房を絞った縄が二本で下に垂らされ、途中で結び玉が幾つか作られて――ひときわ大きな結び玉が淫裂に食い込んだ。
「い、痛い……！」
「マゾ牝の痛いは、気持ちいいってことだよな？」
　縄尻が背中で引き上げられて首縄につながれた。
　お腹を縦に走っている二本の縄に一本ずつ別の縄が結ばれて左右に引き絞られた。股間の結び目が食い込んできて、膣口を圧迫する。
「痛い……気持ち良くなんかない。お願いです、すこしだけでいいから緩めてください」
　無駄とわかっていても、訴えずにはいられない。痛いというよりおぞましい。
「脚を開けば縄は自然に緩むさ」

ゴム張りの床に座らされて、正座での開脚ではなく胡坐を組まされた。サヨコが左足首をつかんで、右の太腿に乗せた。右足首は左の太腿。中学校の体育で習ったことがある。座禅の正しい座り方で、ヨガにも取り入れられている。それはどうでもいいことで、こんなふうに足を組むと、手を使わないと元に戻せない。

股間に結び玉を食い込まされていて、むしろよかった。結び玉がなければ、奥まで丸見えになる。といっても――小淫唇まで結び玉で左右に押し出されているから、恥ずかしいことに変わりはない。

左右の脛がクロスしたところも縛られて、その縄尻が首につながれた。

「おらよ」

背中を前へ押されて、首の縄が縮められた。わたしは身体を三十度ほど倒した姿勢から動けなくなった。

「二つ折りにすれば海老責めになるが――今

日のところは見学だからな。おとなしく見ていろよ」

いびつな球形に縊り出されている乳房を、ナカノが背後からつかんだ。まだ虐められるのかと身構えたけれど、何回かぎゅもぎゅと揉んだだけで、すぐにやめてくれた。

そうして、里菜さんへの処刑が始まった。ボランティアの三人がすべての責めを見物できるよう、ひとりずつ順番に処置していくつもりらしい。

里菜さんは昼からずっと拘束されていたハーネスから解放されたが、すぐに十字架に大の字に磔にされた――開いた足をのせる横棒があるので正しくは『キの字架』というのだと、あとで幸恵さんから教わった。

里菜さんは操り人形みたいにぐてっとしているけど、うつむけた顔が引き攣っている。

「電極の装着は俺にやらせろ」

里菜さんにペニスを噛まれた男が、細い鎖の絡まった革ベルトをカンダから取り上げた。

「お手をわずらわせて申し訳ございません。里菜を厳しく罰してください」

まるで電撃首輪をつけられているみたいな小さな声が震えている。そんなことはちっとも望んでいないのに、マゾ牝の作法として強制されている言葉だ。

「心のこもっていないセリフだな」

男が里菜さんの腰にベルトを巻いて、きつく締めた。ベルトの左右に垂れている細い鎖の先には小さなクリップが付いている。紙を束ねるときに使う目玉クリップ。それが、はみ出ている小淫唇に噛みついた。

里菜さんはピクッと身体を小さく震わせたが、呻き声すら洩らさない。

さらに別の鎖が太腿の下から前にまわされて、クリップが小淫唇の下側を挟んだ。男は鎖の長さを調節して、里菜さんの小淫唇を、翅を広げた蝶々みたいにしてしまった。

四本の鎖が銀色なのに対して、ベルトの正面に垂れている鎖は金色だ。先端のクリップ

も細長くて口がギザギザになっている。わたしも電気の実験で何度か使ったことがある。ワニグチクリップ。小指をはさんでもそんなに痛くは感じなかった。

展翅された小淫唇の頂点に露出しているクリトリス。男は、その包皮をつるんとめくって、粘膜にワニグチクリップを噛ませた。

「ひぐっ……」

しゃっくりのような小さな悲鳴は、わたし。見ているだけで、背筋に鳥肌が立つ。目をそらしたいけれど、目をはなせない。

男は金色の鎖も短くして、クリトリスをペニスが勃起しているみたいにしてしまった。

「では、処刑開始だ」

この男は電撃と言ってた。これまでの残酷な器具の装着は、その準備に過ぎなかったんだ。

男は小さな鍵で、ベルトの脇に付いている箱の蓋を開けた。

「電圧は最大にして……通電時間は十秒以上

ランダム。タイマーはオフ」
　カチッ……蓋が閉じると同時に。
「ぎゃわあああああっ……！！」
　里菜さんは獣のように吠えて、キの字架に縛りつけられた身体を弓のように反らせた。
「……！」
　口を悲鳴の形に大きく開けていても、息を吐き出しきって声にならない。
　ひどい……苦痛と快楽を同時に与えるのが基本だと里菜さんは説明してくれたけど、この拷問に快楽の要素なんか、あるはずもない。
　里菜さんはのけぞったまま、全身を痙攣させている。わたしも春香ちゃんも彩子さんも、息を呑んで里菜さんの苦悶を凝視している。コスプレナースのサヨコも顔面蒼白。
　ええっ……！？　アイコはミニスカートの上から股間をまさぐっている。里菜さんの苦しんでいる姿に興奮している――というより、自分が電撃を受けているところを妄想してるのかもしれない。クリトリスへのお灸が気持

ちいいだなんて言ってたくらいだから、この人はほんとうに苦痛が好きなマゾなんだろう。
八人の男たちは、こいつらはほんとうに愉しんでいる。目をぎらつかせてズボンの前を膨らませているボランティア、薄嗤いを浮かべて眺めている院長とスタッフ。
不意に、里菜さんの身体からくてっと力が抜けた。小箱で設定された通電時間が終わったんだ。
「では、彩子の鞭打ち特訓も始めましょう」
院長が、鞭打ち役のボランティアをうながした。
彩子さんは両手首を重ねて前で縛られて、天井から垂れ下がっている鎖につながれた。
ウイイイイイ……ウインチが鎖を巻き上げて、彩子さんの両手は頭上高く引き上げられた。右足首にも縄が巻かれ、右脚が水平になるまで吊り上げられて別の鎖につながれた。
「百発は腕がしんどい。ナカノくん、マシンをセットしてくれ」

逆Ｌ字形の棒が立っている踏み台のような装置が彩子さんの背後に置かれた。水平な棒の先端には、細長い鞭が取り付けられている。
ナカノが踏み台のボタンを押しても、すぐにはなにも起きなかった。五秒ほどしてから
ヒュンッ！
逆Ｌ字形の棒が素早く回転して
バチン！
「あうっ……」
彩子さんのお尻を鞭が叩いた。そして、マシンはしばらく止まる。
「こっちは僕が可愛がってあげよう」
その一人称代名詞がぴったりの雰囲気の若い男（といっても二十代後半かな）が、握っている鞭の柄で彩子さんの股間をくじった。
彩子さんが嫌悪の表情を浮かべたのを院長が横から見ていて。
「マゾ牝の作法を忘れたのか？」
彩子さんはあわてた様子で。
「ありがとうございます。彩子をたっぷりか

わいがってください」

わたしも、虐められるときはお願いとかお礼を言わされるんだと思うと、鞭打たれることへの恐怖よりも、屈辱と怒りが先に立ってしまう。

若い男が彩子さんの正面に一メートルくらいはなれて立った。右手に鞭の柄を握って、左手で鞭を引き絞った。肘から先だけを振る形で、鞭を彩子さんの左の乳房に叩きつけた。

バシャッ！

鞭は何本もの細いバンドを束ねてあって、それが広がって乳房に襲いかかった。乳房がひしゃげて、ぶるんと弾んだ。

「ひぎゃああああっ……！！」

数秒後の悲鳴は悲鳴は彩子さんではなく里菜さんだった。全身を弓なりに反らせて痙攣している。また通電が始まったんだ。

バシャッ！

バックハンドで右の乳房に鞭が叩きつけられた。たちまち、数条の赤い痣が乳房に浮き

上がる。
　彩子さんは悲鳴をあげない。クリトリスへの電撃に比べたら、乳房への鞭打ちのほうが苦痛は少ないんだろう。でも、わたしだったら――絶対に泣き叫ぶと思う。
　乳房への鞭打ちが続いているうちに、里菜さんの悲鳴が途絶えた。糸の切れた操り人形みたいにうなだれて、ぴくりとも動かない。気絶したのかもしれない。
　十発以上も鞭打たれた彩子さんの乳房は、鞭の痕が重なって全体がまっ赤になった。
「初日のビデオではおおげさに悲鳴をあげていたが――すこしは鞭に馴染んだのかな？」
　若い男が鞭を逆手に持って、柄を股間にねじ挿れている。深く突き刺してこねくって、親指の爪でクリトリスを弾いたりしている。
「はい……あ、お赦しください。あ、はああ」
「違うだろ。もっと可愛がってくださいだろ」
　そう言われても仕方がないくらい、彩子さんの声は蕩けている。

苦痛と快楽とが同時――里菜さんの言葉が、また頭に甦った。
「あ……はい。もっと可愛がってください」
男は鞭の柄を抜いて後ろに下がった。
「痛いのは、もう厭。気持ち良くしてください……」
「これで逝けるようになるための特訓だろう？」
男は腕を垂らしたまま後ろへ引いて、アンダースローみたいに鞭を振った。
わたしは、思わず目をつむった。
「きゃああああっ……！」
バシュンという湿った鞭の音に、甲高い悲鳴が重なった。
股間を鞭打つなんて、ひど過ぎる。自転車に乗ってて、うっかり溝に車輪を落とした反動でサドルに恥骨を打ちつけたことがあるけど、そのときは転げ落ちて数分間は悶絶してた。鞭は、その何十倍も痛いだろう。恥骨だけじゃなくてクリトリスも割れ目の奥も、同

時に叩かれて――自分が鞭打たれるところを想像して、心臓が握りつぶされたみたいに息苦しくなった。
「ひゃああっ……！」
　二発三発と、鞭が股間に叩きつけられる。背後の鞭打ちマシンが、そのあいだもお尻を叩き続ける。
「では、春香の治療も始めるとしよう」
　春香ちゃんは、天井が鏡張りの大きなベッドに自分から寝そべった。
「そうではない」
　春香ちゃんを横にどかせて、院長が裸になってベッドのまん中にあお向けに寝た。
「対面座位の復習だ」
　春香ちゃんは身を起こして、院長の股間にてろんと垂れているペニスを見下ろす。両手でペニスを握って何度かしごいてから、院長の股間に顔を伏せた。
　チュウウウ……ずぞぞぞぞ。
　頭の陰に隠れているが、なにをしているか

は音だけで見当がつく。
　春香ちゃんが上体を起こしたとき、ペニスは何倍にも大きくなって天井に向かって聳え立っていた。春香ちゃん、嬉しそうというか勝ち誇った表情。
　膝立ちになって院長をまたぐと、右手をお尻の後ろにまわしてペニスをつかんで腰を沈めていく。左手で大淫唇をくつろげてペニスを割れ目に迎え挿れて、腰を前後に動かしているのは膣口を探っているのかな。
　そして、一気に腰を落として馬乗りになった。
「ああん……オマ「●コ、ヒリヒリする。でも、気持ちいいよう……」
　演技じゃないみたい。声がうっとりしてるし、ぐりぐりと腰を動かしている。
「もっと気持ち良くさせてやるから、じっとしてろ」
　里菜さんに電撃の懲罰を与えていた男が、里菜さんを放置してベッドに近づいた。里菜

さんはタイマーでランダムに通電を繰り返されて、そのたびに絶叫している。
　男は裸になってベッドに上がって、後ろから春香ちゃんを押し倒した。
「よいしょ……」
　院長がブリッジみたいに腰を突き上げて、その下にサヨコが大きな枕を押し込んだ。春香ちゃんのお尻が高く持ち上がって。そこにサヨコがとろっとした液体を垂らして、お尻の奥に揉み込んだ。
　これって、もしかして？　と思ったとおり――ボランティアが院長の脚をまたいで、硬直したペニスを春香ちゃんのお尻にあてがった。
「お尻、やだよう。気落ちよくなんかない」
「だから治療してやるんだよ」
　ボランティアが、ぐんっと腰を突き入れた。
「はあああああっ……痛いよう」
「おっと、口を閉じるんじゃないぞ」
　それまでずっと見物していた三人目のボラ

ンティアが、膝立ちになって院長の頭をまたいだ。肛門を犯している男が春香ちゃんの両手を後ろへ引き上げて、持ち上がった頭を押さえつけるようにして、三人目がフェラチオを強制した。
「では、アナル音頭で」
「パパンがパンってか？」
　肛門を犯している男が腰を前後に動かし始めた。春香ちゃんの上体も前後に衝き動かされる。その動きに合わせて院長が腰を突き上げる。フェラチオをさせている男は、自分ではあまり動かずに春香ちゃんの頭を揺すっている。
「うぶぶ……ぐぶ……」
「舌を使え。ウラスジを舐めろ。吸い込みながらカリクビを甘噛みするんだ」
　春香ちゃん、苦し涙をこぼしながら頬をすぼめて――ズチュウウ、スゾッとペニスを啜り始めた。
　三人の大人に挟まれて、揉み苦茶にされて

――気持ち良くなるはずがないわよ。苦しまぎれにペニスを噛むんじゃないかって、見ているわたしのほうがハラハラする。

わたしはけっして潔癖症じゃないし、そんなに品行方正純情無垢でもない。アダルトサイトでこっそり無料動画を観るくらいはしている。そういうＳＥＸシーンでは、パンパンパンパンなんて派手な音をさせながら一秒に二回くらいのピストン運動だけど、この三人は、もっとゆっくり腰を動かしている。

わざと刺激を抑えているんだろう。延々と十分ほども春香ちゃんを翻弄し続けるうちに。

「んんん……ふうん、んんん」

春香ちゃんの口は塞がれているので鼻から漏れる息が、だんだん艶やかになってきた。前後上下に揺すぶられながら、自分でも腰を左右にくねらせ始めた。

ジュップジュップと湿った音が、三人の下半身が結合しているあたりから聞こえてくる。

「ああん……お尻が焼けちゃう、オマ●コが

痛い。でも、気持ちいいよう……」
　フェラチオがお留守になってきたけど、三人目の男は叱らない。自分の快感より春香ちゃんを逝かせることが目的になってるとしたら――この人たちは、やっぱりボランティアなんだな。なんて、この場の淫靡な雰囲気で、わたしの頭がおかしくなりかけてる。
「お願い……もっと烈しくしてえ」
　春香ちゃんが、とんでもないお願いを口走った。
「それでは、ぼつぼつフィニッシュといきますか」
　男たちの動きが倍速になった。
　ズッチュズッチュズッチュ、ニッチャニチャニチャ……湿った音がハイピッチになって。フェラチオをさせている男が春香ちゃんの頭を押さえたまま腰を前後に振り始めた。
「出すぞ、全部呑め……！」
　春香ちゃんの顔に押しつけた腰が、ビクビクッと痙攣した。

「んんん、ぐ……」
　春香ちゃんの喉が上下に動いた。
　男がはなれると、春香ちゃんの身体はいっそう激しく翻弄される。肛門を犯している男は春香ちゃんの腕をさらに後ろへ引っ張ってのけぞらせ、小さなお尻にたるんだ下腹を打ちつける。不意に動きが止まって、その男も春香ちゃんからはなれた。男のペニスは、すこし赤くなっている。春香ちゃんの肛門が裂けたのだったら、悲惨。
「また痛いよ……痛い、痛い！」
　顔をしかめて訴えながら、春香ちゃんは腰を上下左右にこねくるのをやめない。
「うあああ……ここ、ここ、ここ！」
　上体を起こしてニワトリみたいに鳴きながら、院長の股間に腰を打ちつけ始めたと思ったら。
「ああああああ……春香、オマ●コはじけちゃう。パパ、パパ、パパア！」
　背中をそっくり返して絶叫して、くてっと

院長の胸に倒れ込んだ。
　院長が身体を起こして春香ちゃんをベッドに転がしても、春香ちゃんはぐったりしたまま動かない。
「初日にして治療効果抜群ですねえ」
　彩子さん担当の若いボランティアが、春香ちゃんの恍惚とした顔を覗き込んで言う。
「いや、まだまだ。父親への依存は根強いと見た」
「では、僕も注射をしてやりましょうか」
「あなたは、彩子に褒美をやらなくてはいかんでしょうが」
　春香ちゃんの痴態に目を奪われて、彩子さんのほうは見ていなかった。規則正しい間隔で鞭の音は聞こえていたけれど――見ると、鞭打ちマシンが二台に増やされて、彩子さんのお尻と下腹部（子宮の上あたり）を叩いている。
「そうでした、そうでした」
　若い男は、頭を掻きながら彩子さんのとこ

ろへ戻って行った。やけにあっさりとしている。たぶん、春香ちゃんを昼に抱いてるんだと推測した。
　キの字架に磔にされてクリトリスに電撃責めを受けている里菜さんは、がっくり頭を垂れて、失神している。
　鞭打ちマシンが止まって、彩子さんは片脚吊りから解放されて床にへたり込んだ。
「そこのベッドへ上がれよ」
　彩子さんは這ってベッドまで行った。
　春香ちゃんは絶頂の余韻に浸ったまま、サヨコに肛門の手当てをしてもらっている。
「切れ痔にはなりませんが、明日いっぱいくらいは異物挿入を避けるべきです」
「処女の花嫁でも、新婚旅行中は毎晩だぞ？」
「膣と肛門とでは構造が違います」
　コスプレナースも基本的にはマゾ牝扱いだと思っていたけど、毅然とした態度。コスプレじゃなくて、本物の看護婦なんだろうか。
　若い男はベッドの隅で、あお向けの彩子さ

んの両足をつかんで肩まで曲げた。マングリ返しってやつ。内腿も鼠蹊部も大淫唇も、無数の蚯蚓腫れでまっ赤。
「おら……」
　若い男が彩子さんにおおいかぶさって、怒張したペニスを口元に突きつけた。
　彩子さんは頭を起こして、それをしゃぶった。フェラチオというより、唾をまぶして潤滑をよくするための作業。
　男が腰の位置をずらして、片手でペニスを押し下げながら淫裂に突き立てた。
「くうう……」
　彩子さんが顔をしかめる。さんざん鞭打たれて腫れたところに、あんな太い肉棒を突っ込まれるんだから――これはご褒美なんかじゃなくて、拷問の続きだ。
　男が腰を激しく動かし始めると、彩子さんは悲鳴をあげた。
「い、痛い……お赦しください」
「そうじゃないだろ」

男は彩子さんの膝の裏側に肩をあずけて、自由になった手で乳房をわしづかみにして指を食い込ませた。
「鞭の味を覚えた褒美をやっているんだ。痛いんじゃなくて気持ちいいんだろ？」
「……申しわけございません。でも、ほんとうに痛いんです」
感覚については、御主人様の言葉を否定してもよかったはず。
「これを痛いと感じるようでは、マゾ牝の修業が足りないぞ。特訓だ」
若い男はペニスを抜いた。赦してあげるのかなと見ていると――アイコが男にC字形の金属環を手渡した。男はそれをカリクビに巻いて、カチッと環を閉じた。
「ひぐっ……」
彩子さんがしゃっくりみたいな悲鳴を漏らした。
その金属環は、外側に鋭い棘が植えられていた。正確には棘でなくて、長さが一センチ

弱の先端が三十度くらいの円錐形。それが全部で八本くらい。
「お願いです……さっきのように生のおチ●ポ様でかわいがって……いただきたいと思います」
　声が震えている。
　若い男は、また彩子さんの脚を肩に担ぎ上げて――ずぶずぶとペニスを淫裂に突き刺した。
「ぎいいいっ……ひいい！」
　彩子さんは甲高い悲鳴をあげて、全身を硬直させた。
　男が腰を動かし始めると、その動きに合わせて、彩子さんが呻く。
「あうっ、あうっ、あううううっ……」
　アクメに追い上げられようとしているようにも聞こえる。
「ぎゃあああああっ……！」
　失神から醒めて地獄に引きずり戻された、里菜さんの悲鳴。

「もう大丈夫だよ。もっと春香をかわいがって……ください」
　春香ちゃんがあお向けになって膝を立てた。どうせ犯されるにしても、変則的な体位はつらいから正常位でっていうアピールかな。それとも。本気でもっと抱かれたがっているんだろうか？　彼女の本心がいちばんわかりにくい。
「カンダくん、淫乱娘の相手をしてやってくれ。Mさんにもお願いできますかな」
　名前を呼ばれた二人が、いそいそとベッドに上がった。Mと呼ばれた男が春香ちゃんの脚を蛙みたいに開かせて、胡坐の上に乗せて挿入。青色ツナギ服のカンダは横ざまにおおいかぶさってフェラチオをさせる。
　春香ちゃんは左手でカンダのペニスの根元を握って（喉の奥まで貫かれない用心かな）微妙に指を動かして刺激も与える。そして右手はクリトリスをまさぐり始めた。
「んぐんぐ……んんん」

「あうっ、あうっ、あうっ……ひいい！」
「ひゃぎゃあああああっ……！」
　三人への責めは、それから一時間以上も続いた。